

16.07.2014

日本友の会発足4周年懇談会

7月2日（水），小泉大使は，ブルガリアの日本関連団体の傘機関であり，当地における日本文化月間の共催団体である「日本友の会」発足4周年を機に，同会のこれまでの活動や今後の方針につき情報共有し，また，外交関係再開55周年を迎えた二国間交流のあり方等につき意見交換を行うことを目的とした懇談会を開催し，50名程の会員が出席しました。

小泉大使は，冒頭挨拶の中で，これまでの「日本友の会」の活動や当館への支援に対し謝意を表するとともに，日本文化月間の開催をはじめとする様々な事業において協力関係を深化させ，二国間の関係発展の強固な基礎となることを期待すると述べました。また，バシカロフ日本友の会会長からは，昨年の同懇談会にて提案のあった55本の桜のサウスパークへの植樹を気候にもよるが，10月の下旬に行う予定であると報告がありました。

また，同懇談会では，小泉大使，バシカロフ会長，イヴァノフ・ソフィア市第18総合学校副校長による講演「日本・ブルガリア外交関係再開55周年を迎えて」を行いました。各人の講演内容については，以下をご参照ください。

小泉大使講演内容

バシカロフ会長講演内容

イヴァノフ・ソフィア市第18総合学校副校長

懇談会の最後には活発な意見交換が行われ，ジェコフ事務局長からは，これまでの日ブ交流55年の歴史を小泉大使の講演にあったように「数字」を用いて書き留めていきたい旨提案がありました。



「日本・ブルガリア外交関係再開５５周年を迎えて」
＝「日本友の会」年次会合での小泉大使による講演＝

両国の外交関係の歴史は国交樹立後、１９３９年に相互に初めて公使館を開設して始まり、１９４４年９月、ブルガリアにおける共産党政権成立により一時外交関係を中断しましたが、１９５９年９月に外交関係を再開しました。両国は両大戦で敵対関係になったことがなく、伝統的に良好な関係を有しています。

この５５年間の両国間関係のランドマークとなる出来事は、あまりにも多くあり過ぎてその全てに触れることは無理でしょう。また、年代を追って概要を網羅的に説明しても皆様も飽きてしまいますので止めておきたいと思います。そこで、幾つかの鍵となる数字を示して、この数字との関係において私なりの印象や関係の特徴についてお話ししてみたいと思います。

先ず最初の数字は「１９７０」です。おわかりのとおりこれは数字ではなく暦年です。１９７０年に日本の大阪で初めて万国博覧会（Ｅｘｐｏ）が開催されました。その時以来、１９７５年の沖縄、１９８５年の筑波、１９９０年の大阪、２００５年の愛知と日本で開催された計５回の万国博覧会の全てにブルガリアは参加してくれました。その事実自体が、ブルガリアが日本との関係を大切に考え、友好関係促進に努力してきた証ではないかと考えています。特に１９７０年の万博はブルガリアにとっても歴史的に初めて参加した万国博覧会であると承知しています。昭和天皇皇后両陛下はブルガリア館をご訪問になり、当時珍しかったヨーグルトを召し上がり、おかわりをされたとのエピソードが残されています。因みに日本で「ブルガリア」の名称がついたヨーグルトが発売されたのは、それから３年後の１９７３年のことになります。今やその名前は日本中で知られています。

そして、１９７０年の大阪万博に合わせて当時のジフコフ首相が訪日されました。この時以降、同首相のイニシアティブもあって、ブルガリアは日本との関係は各分野で急速に拡大していくことになります。１９７０年と言えば東西冷戦の真っ只中にあった時期です。トドル・ジフコフ氏については、歴史的に批判や非難があることは承知していますが、殊日本との関係に限れば、同氏はその発展に貢献した功労者の一人であったと言えるでしょう。勿論、日本側においても、ブルガリアとの関係促進に積極的であった方々が多くいます。例えば日本ブルガリア経済委員会の初代の会長であった今里廣記氏などはその一人といえるでしょう。

また、この歴史に象徴されることは、両国間には、東西冷戦の最中であれ、体制転換の激動期であれ、ブルガリアがＥＵの加盟国となった現在においても、一貫して「友好的な関係」が存在し続けてきたという事実です。これは、お互いの国民が政治体制の違いを超えて、互いの国、文化そしてそこに住む人々に敬意を払い、お互いに親近感を持ち、そして好意を寄せてきたからに他ならないと思います。それは、所謂社会的地位や、分野など

に関わらないことに注目したいと思います。日本とブルガリアの関係が様々な分野で発展しつつあった1979年には、現在の天皇・皇后両陛下が皇太子・同妃両殿下としてブルガリアをご訪問されました。今もこの日本大使公邸には、皇太子・同妃両殿下がブルガリアの民族舞踊を楽しそうに踊られている写真が展示されています。その後も我が国皇室からは1987年6月三笠宮同妃両殿下、1996年9月清子内親王殿下、さらに2009年には秋篠宮同妃両殿下もブルガリアをご訪問され、暖かい歓迎を受けています。このように日本の多くの皇族がブルガリアを訪問され、ブルガリアに強い親近感と友情の念を持たれているということも象徴的な出来事でしょう。

一方で別の一つの事例も紹介したいと思います。日本のAFSという団体が、毎年ブルガリアを含め世界各地から高校生を6週間程度日本に招待し、各地のホーム・ステイ先に宿泊して様々な交流を行うプログラムを持っています。ブルガリアからも毎年数名がこのプログラムにより日本を訪問しており、大使館もその実施に協力しています。そのAFSの関係者によれば、こうした世界各地からの高校生を受け入れてくれるホーム・ステイ先を探すのに毎年苦勞するそうです。しかしながら、何故かブルガリア人の高校生の人気が非常に高く、「受け入れたい」という家庭が多いために断るのに苦勞するそうです。多くの場合、日本のホームステイ先の家族とはその後も交流が続いているそうです。この事実は、ごく一般の人々の間で、世代や置かれた環境を超え、日本人とブルガリア人が相互に好意を抱くことが多い事実を物語る典型的な事例と言えるでしょう。それは何故か。ここではそれを論じることが目的ではありませんので、ご出席の皆様にもその理由を考えていただければ幸いです。

次に鍵となる数字として指摘したいのが、「42」という数字です。この数字は何だと思われますか？ これは大使館で把握している両国の大学や研究機関間などで結ばれた学術交流協定の数です。この中には2年前に結ばれた日本学術会議とブルガリア科学アカデミーの間の交流協定も含まれています。これらの交流協定を通じて、ソフィアのみならず、プロブディフ、ヴァルナ、ヴェリコ・タルノヴォなどに所在する大学や研究機関と日本の25に及ぶ各地の大学や学術機関の間での学術・教育交流が実施されてきました。今もソフィア大学ではこうした協定に基づき、東海大学、創価大学、福山大学の学生が学んでいます。また、5月に訪日したポポヴァ副大統領は、やはりソフィア大学との協定がありブルガリアから一人の教授が派遣されている明治大学で講演をされています。私が何故このことに触れたかと言いますと、こうした交流は普段はあまり目立つことがなく、注目されることも少ないと思いますが、実はこうした着実な交流が両国関係を支える基盤となると考えるからです。特に留学生の交流は、その成果が出るまでには時間はかかりますが、将来的にそれぞれの国の様々な分野で活躍し、友好関係を結ぶ「橋」となる大事な存在です。実際に個人名は出しませんが、今も日本やブルガリアで活躍するかつての留学生の方々を何人も知っています。私は、日本人であれ、ブルガリア人であれ、そうした方々の益々の

活躍をいつも尊敬の念をもって見守っております。

そして教育交流と切っても切れないのが、文化交流です。文化交流がいかなる国同士の間でも重要であることは、論を待たないところでしょう。私は、文化と教育の両方が車の両輪となって共に発展する時、それがあつた一国であれ、また国家間や国際社会であれ、そこに住む人々の幸福と平和を実現できる基盤ができるのだと考えています。そのことは、ブルガリアでも日本でも、また両国の関係においても同様でしょう。その意味で私は、この講演をするに当たり、ブルガリア、日本双方で様々な分野での交流に功績のあつた方々への叙勲者名簿を見てみました。その中には文化・教育交流に尽くされた民間の方々のお名前が多く見られました。ブルガリア国から叙勲された方々を、年代順に幾つかのお名前だけを挙げて、松前重義、園田天光光、黒川紀章、池田大作、池田恒雄、松前達郎、猪谷晶子、等々、皆様も耳にされてきたと思われるの方々のお名前が見られました。本日も出席の方々の中にも、後ほどお話いただくブラティスラフ・イヴァノフさんなど、両国間の文化・教育交流に貢献され日本国から叙勲された方々が何人もいらっしゃいます。もちろん叙勲された方々のみが文化・教育交流の促進を担ってきたわけではありません。ブルガリアでも日本でも、文化や教育の分野で両国間の交流を自らの意思で積極的に進めてこられた多くの個人や団体があります。そうした方々や団体があつてこそ、ここまで両国間の友好関係が幅広くかつ強固なものに発展してきたのだと思います。

その文化交流という点で大事な鍵となる三つ目の数字を挙げたいと思います。これも不思議なことに先ほどと同じ「42」です。この数字は何か。今回の「日本友の会」総会に私が招待した「友の会」会員を含む関連団体の数です。皆様も良くご存じの通り、「友の会」には、日本の文化、芸術、スポーツなどに親しんだり、交流を促進することを目的とした諸団体が多く含まれています。その活動の幅広さや熱心さには、私も常々驚き、感動と尊敬の念を覚えています。今や、この「友の会」所属の諸団体の活動こそが、ブルガリアにおける日本との文化交流の核であるということが出来るでしょう。バシカロフ会長とジェコフ事務局長のご指導の下、これからの益々の発展を期待したいと思います。特に最早伝統行事となつた「日本文化月間」については、本年で四半世紀の節目となる第25回目を迎えますが、ここ数年は「日本友の会」との共催で実施しています。6月23日には、日本で著名な華道家である假屋崎省吾氏とブルガリアで人気の高いヴァイオリニスト、ヴァスコ・ヴァシレフ氏をお招きし、生け花とヴァイオリンのコラボレーションによるオープニング・セレモニーを多くの来賓を得て開催いたしました。本日も参加の皆様の中にもこの行事もしくは更にこれに続く假屋崎氏の生け花展に参加いただいた方々がいらっしゃいます。また、バシカロフ会長には、ご祝辞をいただきありがとうございました。

さて、外交関係再開55周年を迎えた日本・ブルガリア両国関係については、これから60周年、70周年そして100周年と、これから更に発展を期していかなければなりません。そこで大切なことは、両国関係の更なる発展を担うべき後進の育成であると思いま

す。現在の青少年の世代に将来を託すしかありません。現在ブルガリアにおける日本語学習者は1, 400人を超えていると言われますし、また、文部省の国費留学生もこの20年で460人を超える数となっています。こうした若い世代から様々な分野でこれからの両国関係の発展を担う人材が育ってくることを期待したいと思います。私自身も、また私の妻も同様ですが、地方都市を含めできるだけ多くの青少年と会い、語る機会を作ってきましたし、また、これからも作ってきたいと思っています。そうした出会いや、語らいの中から将来の人材の芽を育てていきたいと考えております。どうか、「日本友の会」の皆様にも、それぞれの分野で後進の育成に意を用いていただければ幸いに存じます。

ご静聴ありがとうございました。

日本友の会総会
ペタル・バシカロフ会長の講演（仮訳）

小泉大使閣下

尊敬するご列席の皆様

日本の友人の皆様

小泉大使の日本・ブルガリア外交関係再開５５周年に関する非常に興味深く有益な講演に対しまして感謝申し上げたいと思います。小泉大使のブルガリア・日本関係の発展と両国民の相互理解深化への貢献に深く謝意を表するものであります。講演では、政治、学術、文化面におけるブルガリア・日本関係発展の客観的構図が示されており、本テーマのもとこれからの対話を発展させることができると思います。

ブルガリアと日本は、この後ブラティスラフ・イヴァノフ教授からもお話いただくとおり、公式な関係において長い歴史を有しており、１９５９年に外交関係を再開してから、５５年となります。二国間において、伝統的な友好関係及び様々な分野での協力関係における確固とした基礎が築かれております。イヴァノフ教授より、未来においてより深い研究に対象に値する、我々の知られざる歴史について紹介していただけることと思います。

我々の関係において、注目すべきことは両国は、敵対関係にあったことがないということ、また日本は常にブルガリアにとって現代社会における共通の価値を共有する最重要のパートナーであったということです。日本は継続した支援を表明し、我々の国における民主主義プロセスの発展へ貴重な協力をしてくれており、我々はブルガリアと日本の間に争い事は存在しないと断言することができます。

これは、ブルガリア、日本の国家機関が行ってきた継続した政策の結果であることはいうまでもありません。すでに小泉大使も述べたように、両国間関係の確固とした基礎を築いた何世代にもわたるブルガリア、日本の秀でた代表の努力も決して小さいものではありません。その中には、東海大学の創立者松前重義教授、そのご子息、東海大学現総長の松前達郎教授もいらっしゃいます。

二国間関係の歴史の中で、経済、学術、文化面での協力において一つの新しく活発な段階の１ページとなった７０年代の意義を強調すべきであると思います。大阪万博へのブルガリアの参加、東海大学との協力は二国間の結びつきや協力関係の進展の基礎となる役割を果たしました。

地理的には離れているにもかかわらずこのような関係者及び東海大学のような力のある教育機関との活発な協力関係の知恵と努力により、二国間関係において貴重な資本が積み重ねられてきたといえるでしょう。このような財産を無駄にせず、特に経済分野における未来の更に実りのある結びつきや協力の基盤として次世代に伝えていくことが大事であるという小泉大使の意見に私も賛成します。

ご静聴ありがとうございました。

冷戦終了時までのブルガリアと日本の外交関係

小泉大使閣下

尊敬するバシカロフ日本友の会会長

尊敬する日本友の会会員の皆様

講演に移る前に、日本語・日本文化教育に関わるブルガリアの教育機関に対して日本が行ってきた多大な支援につき、日本政府の代表として、また個人として小泉大使閣下に感謝申し上げたいと思います。

我々が入手できる確かな情報によると、ブルガリアを初めて訪れた日本人は、露土戦争の観戦武官である山沢静吾氏であります。プレヴェンにて山沢氏はトルコ兵との戦いに参加します。これは、ロシア皇帝からの勲章に値するものです。これは、著名な日本のブルガリア研究者寺島憲治氏によって示されています。私は、我々が歴史を認識していると示すため、感謝を表すため、彼の後継者を探す責務があると思います。

1906年日本の作家徳富蘆花は、レフ・トルストイに会うためエルサレムからロシアを訪る際、ブルガリアを通りました。彼の日記には、日本の知識人による初めてのブルガリアの印象が書かれていました。興味深いのは、徳富蘆花の短編「灰燼」に描かれている社会プレセスが、エリン・ペリンの短編「トビ」に描かれているそれとかなり似ているということです。

ブルガリアと日本の外交関係の礎は、1927年、通商と最適国条項に関する公式文書の交換によって築られました。

1939年にソフィアで日本の公使館が開設され、12月28日に蜂谷輝夫駐ブルガリア公使はボリス王に信任状を提出しました。ブルガリアは1942年5月に東京に公使館を開設しました。ブルガリアの初代公使にはヤンコ・ペエフが任命され、9月10日に当時の裕仁天皇陛下（昭和天皇）に信任状を捧呈しました。公使館にはブルガリアの有名な作家スベトスラフ・ミンコフも配属されており、自身の著作で、日本語と日本文化への大変興味深い考察を示されています。1943年2月11日、ペエフ・ブルガリア公使及び谷正之日本国外務大臣は、友好・文化協力協定に署名しました。同年ペエフ公使の後任としてスタン・ペトロフ・チョマコフ氏が任命され、公使館が正式に閉館になる1945年1月8日まで公使を務めました。

1945年から1959年までブルガリアと日本の外交関係は続いてはいませんでした、

私は、このことは、ブルガリア国民の日本に対する伝統的な良い関係に何の影響も与えなかったと強調したいと思います。これは、冷戦の暗黒時代においてもブルガリアで反日本のプロパガンダがなされなかったことから言えるでしょう。

1959年太田三郎在ポーランド日本国大使及びフリスト・ボエフ在ポーランド・ブルガリア大使は、自国政府よりブルガリアと日本の外交関係再開の交渉を開始する全権を委ねられました。交渉は1959年9月12日の共同コミュニケの署名で成功裏に終了しました。両国は全権公使レベルの外交団代表を交換することを決定しました。

1960年ブルガリアは東京に公使館を開設し、フリスト・ボエフを全権公使に任命しました。日本は最初はソフィアに公館を開設せず、在ユーゴスラビア大使が在ブルガリア大使を兼任することにしました。この状態は、両国に設置される公館のレベルが大使館となる1964年まで続きました。初代在ブルガリア日本国大使には、高橋通敏氏が任命され、在日本ブルガリア大使には、フリスト・ズドラフチェフが任命されました。

1966年にはブルガリアの偉大な友人である東海大学総長の松前重義教授がソ連及び東ヨーロッパ諸国との文化交流のための組織を創設しました。彼の招待で、国営ラジオ児童合唱団は、指揮者のフリスト・ネデヤルコフ氏とともに1967年7、8月に日本での初めてのコンサートツアーを実現させました。ネデヤルコフ博士の4つの曲は、日本語に訳され、小学校の歌の教科書に掲載されています。松前重義教授の二国間関係緊密化への貢献は大きく、それだけでも本になるほどです。

第二次世界大戦終了後の日本の早い回復、驚くほどの経済成長、科学技術分野の進展は、1962年の英国「エコノミスト」の記事で初めて「日本経済の奇跡」と表現され、その後2回にわたり掲載されました。

60年代から80年代のブルガリアの政治・経済のエリート達もまた、日本経済の奇跡に深い感銘を受けました。トドル・ジフコフは、首相として1970年に、その後国家評議会議長として1978年、1985年と3度日本を訪れました。特に記念すべきは、1970年の最初の訪問です。彼は社会主義国の要人に向けての手記で特に高度技術分野において日本の例から学ばなければならないと書きましたが、その唯一の反応は、ジフコフ氏は日本の影響下に陥ってしまったというレオニド・ブレジュネフ側からの厳しい批判でした。

ブルガリアと日本が異なる社会・経済システムに属していることによる困難にもかかわらず、あらゆる日本の会社はソフィアに代表部を設け、80年代には、二国間の経済関係は

最盛期を迎えました。これは、ブルガリアの経済・政治エリートの中で突出した人物でもあった歴代の在日ブルガリア大使の尽力によることは疑いようありません。

ブルガリアは科学技術の発展における日本の経験を取り入れようと特別の注意を払いました。松前重義教授のおかげで、1970年には、科学・技術促進・高等教育機関と東海大学間で科学技術協力協定が署名されました。このようにブルガリアの学生の日本での教育機会が開かれていったのです。当時通商・産業大臣で、後に首相となった中曽根康弘氏は、1974年のブルガリア訪問時に、ブルガリアにとって大事な分野における教育と研究に10の奨学金を保証するという約束をしています。

1979年は、ブルガリア・日本の関係の発展と二国間パートナーシップの強化という点で重要な年です。この年、当時の皇太子であられた明仁皇太子殿下、美智子皇太子妃殿下（現在の天皇陛下、皇后陛下）が日本を訪問されました。

1983年には、現在の日本の安倍晋三内閣総理大臣の父である安倍晋太郎外務大臣（当時）がブルガリアを訪問されました。これは、日本の外務大臣のブルガリア初訪問になります。1987年には三笠宮殿下が、1988年には金丸副総理がそれぞれ訪問されました。

日本大使館が発行しているブレティンの記述を中心に安倍総理の発言を注意深く見てみると、恐ろしい地震や福島での事故からの復興だけではなく、日本経済全体への新しい刺激を生み出すことへの彼の決意を深く感じます。

冷戦期のブルガリアと日本の活発な二国間関係は1989年以降の我が国における政治的変革の後における協力関係の確固たる基礎を生み出したことに言及して、講演を終えたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。